寄大夫信安。永正六年生、童名彦三郎。丹羽五郎左衛門長秀殿に祗在、小姓組にて三百貫給り、其後百三十貫加增、郡合四百三十貫被宛行候。能之師匠は益田夕雲、其後觀世大夫黑雪弟子に祗成る。天正九年七月二十日悴菊法師・仙作の兩人へ譲狀有之候。天正九年八月十三日死、年七十三。法名高源院信親居士。』と記してゐる。しかし信安が小姓として長秀に祿仕したといふ事は、長秀生誕の年に於いて信安が既に二十六歳であるのだから信じ難いやうだ。翻つて思ふに、波寄氏に關しては山科言繼卿記に『天文十三年四月九日賀州桂林院・佛眼坊以下四五人下向。波寄又三郎同下向。仍盃勸候。』の文がある。桂林坊と佛眼坊とは共に白山宮の衆徒であるから、波寄又三郎も亦同じく關係のある者であらう。又三郎は固より彦三郎信安ではないが、二人共に波寄なる稀有の家名を冒すが故に、互に一類なるが如く考へられ、更に彦三郎が猿樂なる故に、又三郎も亦然らんと考へる時は、二人は白山宮所屬の猿樂であらうといふ結論に達する。白山宮に猿樂のあつたことは、三宮古記康永四年臨時祭の條にも見える。信安の丹羽長秀に仕へて大祿を得たとするは、後世子孫の加へた蛇足でなからうか。

ナムアン 南無庵 蕉風俳人の庵號で、闌更初めて之を稱へ、門人蒼虬之を襲いだが、その後二派となり、金澤方面では梅室の門大夢・文器之を襲ぎ、京都では千崖・湖陽・九起・公成・良大が繼席した。

ナメダキ 男女瀧 國至郡黑杉の山中に發する男女瀧川が、西二又の南方で小町より發する支流に合する所にあつて、その本流なるを女瀧、支流なるを男瀧とする。高さ四〇米。

ナラガダケ 奈良ヶ嶽 石川郡河内庄奥池領にあり、越中に跨る。二又川はこの嶽より流れ出る。奥三方山の東に並び、越中では倉谷三方といふ。高さ一六四四米。地質石英粗面岩。

ナラジヤマ 楢地山 越登賀三州志故墟考に、楢山は江沼郡楢村の領山であるが、堡址は今明らかでない。一說に楢地山とし、宗滴雜談には猫地山に作るとある。楢地山も猫地山も、共に楢山を誤つたものであらう。

ナラゼ 鳴瀬 河北郡五ヶ庄に屬する部落。

ナラノハコシノシラリ 楢葉越枝折 三册。文政四年富田景周著。大伴家持その他の歌人が、能登・越中の地名を詠出した歌を抄出して、その地名の存廢を詳論し、附錄に加賀・能登・越中の歌枕たる地名を標出し、古今集以後の歌を擧げて考按を附したものである。

ナラモトジンジヤ 楢本神社 石川郡宮丸に鎭座する。式内等舊社記に、『楢本神社。式内一座。宮丸保宮丸村鎭座。今稱楢本大明神。蓋有異說。或曰宮丸社。舊社也。』と見え、藩政の時は本山派の山伏持寶院が之に奉仕した。

ナラモトジンジヤ 楢本神社 石川郡上柏野に鎭座する。もと乙劔社といひ、明治十四年今の名に改めた。故に式内楢本神社たることの主張は當らない。

ナラモトジンジヤ 楢本神社 石川郡下柏野にあつて、天台宗菩薩寺が之に奉仕した。本社は式内楢本神社たることを主張するものの一つである。

ナリ 成 石川郡山島鄕に屬する部落。康正二年造内裏段錢并國役引付に、『二貫八百五十文、相河彌三郎領加賀國村東方并松任成丸之段錢』とある成丸は是であらう。寶永誌に、この村領に善山寺の跡があると記する。

ナリアヒイケ 成合池 源平盛衰記の平家加賀國に討入る段に、『源氏は篠原に城墻を構へてありけれども、大勢向ひければ堪へずして、佐見・白見・成合ノ池打過ぎて、安宅渡・住吉濱に引退て陣を取る。』とある。越登賀三州志にはこの成合池を、水の出合池にて地名ではなからうというてゐる。加賀志徵には、今の江沼郡柴山潟を往時成合池とも篠原池とも呼んだのであり、盛衰記篠原合戰の條に、『實盛討たれて大に力落し、成合を引篠原宿に着』とある成合も、亦篠原に近い地名であらうというて居る。

ナリガミネ 成ヶ峰 石川郡倉谷の部落から南方に在る山。高さ一〇五六米。地質山頂は第三紀層で。南麓に石英粗面岩の地がある。

ナリタアキトホ 成田明遠 字は蓬晦、號は遜宇・濟志、宇兵衛と稱した。三政より五代の孫。享保二年前田綱紀に仕へて千石を受け、馬廻組に列し、八年作事奉行となり、十年退老した。明遠志氣殷實、學を好み、樂を室直清に受け、又詩歌を嗜んだ。十二年歿、年三十七。

ナリタカキ 成田家記 一册。此の書の內容は、第一從正覺院殿安彦左馬助殿へ被遣候一書之趣、第二右之外正覺院殿御物語承覺申趣、第三正覺院殿御幼少より御遠逝迄之儀承覺及見及申趣から成つてゐる。正覺院は成田三成で安彦左馬助と共に丹羽氏の臣として淺井畷戰役に從うたものであるが、第一は左馬助の子左馬助が浪人から信州松本侯に仕へようとした時、正保四年三成が彼の親左馬助の戰功を書き與へた覺書である。第二と第三とは三成の家臣山口彦太郎の弟小作の聞書で、前者は淺井畷役に關し、後者は三政の經歷に關する。

ナリタソウキユウ 成田蒼虬 加賀の藩士成田勘左衛門因玄の族人であるといふ。蒼虬通稱は時二、後庄助。俳諧を闌更に學び、初號を李牧、所居を蕉之屋・槐庵・拾薪庵又は二夜庵といひ、後洛に入つて八坂に住し對塔庵といひ、闌更の歿後寛政十二年双林寺の芭蕉堂に移つて南無庵を稱した。天保五年門人抱儀に招かれて江戸に下り、十三年三月十三日對塔庵に歿した。時に年八十三。東山妙國寺に葬り、分骨を金澤卯辰妙國寺に收めた。句集には嘉永五年大夢の編する蒼虬發句集があり、追悼集には梅室の夏蛙、天保五年近江の芋丈の折柳集、嘉永七年(安政元)梅通の夕ばえ、明治廿四年金澤の蕉の家迚の挿柳集がある。

ナリタミツマサ 成田三政 幼名猿菊、後助九郎・政丞・半右衛門。初め長東正家に仕へ百石を食み、次いで丹羽長重に小松に仕へて二百石を受けた。慶長五年淺井畷の戰に功あり、祿四百石を加へられたが、長重は封を除かれたから、去つて出雲の堀尾忠氏に仕へて七百石を得た。既にして又亡命して若狹に隱れ、十一年來りて前田利長に祿千石を受け、大坂兩役に功を立て、元和五年三百石を增し、寛永八年千石を加へ、十三年再び七百石を加へ、合計三千石を受けて人持組に列し、十六年隱據した利常に從屬し、翌年小松に移り、